

2013年3月30日、31日 モンゴル国立教育大学外国語学部主催

第2回協働学習研修会 「協働学習の実践と展開」

講師：齋藤ひろみ(東京学芸大学)・池田玲子(東京海洋大学)

報告者：池田玲子

モンゴルでの協働学習研修会は3月30日と31日の2日間にわたって開催されました。

研修初日はウランバートルの中心街にあるモンゴル国立科学技術大学の図書館会議室で行われました。翌日(2日目)は会場をうつしてモンゴル国立教育大学本館で行われました。モンゴル教育大学での研修は、私たち(齋藤・池田)にとっては昨年3月の開催につづく2度目となりました(昨年は舘岡先生も講師)。昨年の研修では熱心な日本語教師の皆さんが多く参加してくださったので、きっと今後モンゴルでの協働学習が発展していくのだろう、ぜひ発展させていきたいと祈りながら帰国しました。帰国後は、もっと何か日本語から支援や協働する方法はないものかと思っておりましたところに、今回の研修会開催の知らせが届き、私たちは期待をいっぱい抱えてモンゴルに向かいました。

今回の研修は日本語教育の先生方の多大な努力の甲斐あって、予想外に多くの先生方の参加がありました。昨年の参加者の方々も多かったのですが、もっとうれしいことに、日本語教師だけでなく、英語教育や中国語教育の先生方まで参加されました。参加者の半数近くが日本語以外の外国語教育関係者の方々でした。この事実は、協働実践研究が海外でその国の日本語教育の協働学習のあり方を探求していくことを推奨するだけでなく、その先に目指す目標として掲げた「日本語教育を超えて他分野へも協働の理念や協働学習の意義を発信すること」の可能性を実証したものだのではないのでしょうか。その意味で、今回のモンゴルでの研修は、海外地域における日本語教育から他分野への協働の発信であり、協働のプロセスの始まりだったのだと私には思えます。

【研修会の概要】

今回の研修では、日本語教育関係者以外の方々への参加が多くあったので、講義も活動も全て日本語とモンゴル語の両方で進められました。モンゴル語通訳は、モンゴル教育大学のバヤルマ先生とモンゴル国立大学のオノン先生が担当してくださいました。

バヤルマ先生



オノン先生



1日目の前半は、「協働学習とは」と題した池田・齋藤のミニ講義に始まり、次に齋藤先生のファシリテートによる「個人の学習・グループ学習、ピア学習」の3つの体験学習を参加者全員にしてもらいました。その後、3つの活動を振り返ってもらいながら、その違いについて議論してもらいました。

1日目の後半では、池田が「協働学習のデザイン」についての講義と実践事例紹介をしました。そして、授業デザインのポイントや留意点についてもお話ししました。その後、齋藤先生から、明日のワークショップの案内と課題について説明しました。

多くの参加者にとっては、協働学習の授業デザインは初めてのことだったと思います。本日の講義や体験から参加者の皆さんが協働学習をどう理解され、どう実践へと向かわれるのかと、私たちにとっても明日の課題である授業デザインの中身が非常に楽しみに思えました。

齋藤ひろみ先生

2日目の雪



2日目は会場が隣にあるモンゴル国立教育大学に移されました。この会場は、私たちにとっては昨年の研修を行った場所でもありましたので、昨年の研修のときの熱気が思い出され、過剰に期待を膨らませておりました。ところが、ぼかぼかの昨日の陽気とはうってかわって、朝の窓から見えた景色は道路も建物も真っ白の雪世界となっていたのです。とにかくこの天候変化には驚きました。モンゴルの春は「女心とモンゴルの春」というジョークがあるほど天候が変化する季節なのだそうです。とにかく、この雪のせいで、また安倍首相のウランバートル訪問による交通規制（突然の通知だったとのこと）という悪条件が重なり、私たちの期待は叶わないのかと思いきや、昨日にまして多くの先生方の参加がありました。

最初に池田がごく簡単に昨日の復習を行い、早速、昨日の課題だった協働学習の授業デザインについて、グループ内での検討会に入りました。その後、いくつかのグループに模擬授業をしてもらいました。英語の先生方による模擬授業、日本語教師による模擬授業、中国語教師による模擬授業を発表していただきました。3つの模擬講義について参加者の皆さんには一人一人のコメントを小さなカードに書いてもらい、そのままグループにフィードバックされました。

モンゴル国立科学技術大学

中国語教師グループ



### 授業デザイン検討



最後のまとめとして、参加者の皆さんから寄せられた質問（1日目から出してもらっていたコメント用紙からの抜粋）に対し、池田・齋藤からの意見を簡単に述べました。

- ① コース設置の目的が進学などの場合、協働学習よりも効果的に知識や技能を獲得できる方法があるのではないのでしょうか。

池田：知識、技能の習得だけでいいということであれば協働学習でなくてもいいかもしれません。

しかし、習得を目的とした協働学習には効果がないという意味ではありません。それよりも、習得のためだけではなく、創造的な学習を教室で扱わないと教室で他者と学ぶ意味がないのではないかと思います。個人でできる学習は個人でやればいいのだから、教室ではその先の学習をする必要があるのではないのでしょうか。

- ② 教師が期待するものと学習者の実際のパフォーマンスが大きく異なる場合、教師が教えるほうがいいのでしょうか。それとも協働学習の活動を中心にしたほうがいいのでしょうか。

池田：協働学習は学習者が主体的に学ぶことを主眼にしています。教師が授業をデザインすることは、学習者の学習をそのデザインの中に閉じ込めるためではありません。あくまでガイドとし

て、選択肢提示のつもりで作るものと考えています。学習者の協働力を促進するために教師は支援する役割を担っているからです。

- ③ 話し合いでまったく話をしない学習者の評価をどうすればいいでしょうか。発言はなくても提出したコメントは深く理解されていました。

池田：発言するばかりが参加だとは言えないと思います。じっくり考えていてその時間内では言えなかったこともあるからです。反対には話しながら考えをまとめていくタイプもあると思いますし、とにかく発言してみることで自分に気づき、他者からの指摘が得られると考える学習者もいると思います。だからこそ内省に表れたことの意味は大きいと思います。協働学習に入る前に、教師は参加のあり方を学習者と共通理解を持っておく必要があると思います。

### 【実践報告】「日本語作文授業におけるピア・ラーニング（ピア・レスポンス） 実践報告

モンゴル国立大学 国際言語文化学部日本語学科の日本語教師をされている牧久美子先生から「ピア・レスポンス授業実践」についての報告がありました。

牧先生は、学部3年生に対する日本語作文授業においてピア・レスポンスを採用され、その実践記録をもとに、学習課題のあり方、学習者の日本語レベルと活動の見解、活動のときの使用言語について考察されていました。牧先生が今後の課題として提示されたことは、①教師の支援として相手の作文をもっとじっくり読めるような支援の工夫、②学生のメンタルな部分への配慮、モンゴル語を使用した場合の事後学習の工夫、③最終的に行う教師添削のあり方でした。

ピア・レスポンスをモンゴルで実践してくだっていることに驚きました。モンゴル語話者でモンゴルの学校教育を受けてきた学生たちが、どのようにピア・レスポンス活動に参加するのか、作文がどう変わるのかに非常に興味関心を持ちました。牧先生の記録は詳細なものでしたので、きっとこの先も別の視点からの分析をなさるのだらうと思いました。今後、ピア・レスポンス実践研究者にとって、牧先生の報告内容は貴重な資料となることと思います。牧先生、どうぞ次の報告に向けてますます実践と研究を進めていってください。

### 【お礼のこたば】

今回の研修を主催しこの研修の開催にかかわってくださったモンゴル教師会の先生方、会場校の学生の皆様、学校関係者の方々に心より感謝申し上げます。また、研修会に参加していただき、会場での学びの場を私たち講師と協働して作ってくださった参加者の皆様にもお礼申し上げます。この会への参加は私たち講師にとっても非常にたくさんの貴重な気づきが得られた場となりました。今後の研究、実践にぜひ生かしていきたいと思ひます。